

国際目標 SDGs 関西企業の取り組み

イベリコ豚専門店「タイシコーポレーション」 スペインで植樹活動No. 1 企業を目指す

スペイン南部で伝統的に飼育されてきたイベリコ豚を輸入し、関西・関東で外食、通販や惣菜事業などイベリコ豚に特化した事業を展開しているタイシコーポレーション(大阪市西成区)。衰退する伝統産業の保護と森林保護を目的に、毎年スペインでの植樹活動にも取り組んでいる。「回復および持続可能な利用の推進」「森林の持続可能な管理」などSDGsが掲げる目標に取り組む事業だ。そのきっかけや今後の目標などについて代表取締役の山本真三氏に聞いた。

経営難を救ったイベリコ豚

—イベリコ豚との出会いは

1956年に父が精肉店を創業。その後、卸・外食産業と事業を広げたが、2001年に発生した狂牛病問題で売上げが低迷し、売路を見失ったそうと振り返る。そこで出会ったのがイベリコ豚だった。イベリコ豚はイベリア半島特有の「デササ」と呼ばれる地中海性森林に生息していた野生の豚が家畜化されたもので、生ハムなどの加工業は古代ローマ時代より継承されている。そのうま味と文化に魅了された父は、当時、豚コレラの発生により禁止されていたスペインからの豚の輸入を、日本・スペイン両政府との5年の交渉の末に実現させた。

これを機に現地で雇用が生まれ、父が亡くなった際は地元の人たちが父の愛し

たデササの一角に墓を立ててくれた。

—事業のきっかけは

父亡き後、和牛中心の外食事業を広げたが経営が悪化。売上げの半分を占めていた店もテナントの契約満了で閉店に追いやられ、万策尽きたとき、現地の父の墓が脳裏をよぎり、「これしかない」とイベリコ豚に命運をかけた。それ以来、イベリコ豚に特化した事業を展開している。

持続可能な形で次世代へ

—イベリコ豚とコルク樫との関係は
イベリコ豚はデササと呼ぶコルク樫の森に放牧して飼育され、その実であるドングリを食べて成長する。一頭のイベリコ豚の放牧には、1ha以上のドングリが実るという条件を満たした2~3haのコルク樫の森が必要だ。

—スペインでの植樹活動のきっかけは
デササは年々減少している。最大の理由は、コルク樫の樹皮をむいて作るワインのコルクが、スクリュウ栓や合成樹脂に代替され、需要が激減しているためだ。コルク樫の樹皮は再生するため、このコルクが利益を生むことによってデササが人によって管理されてきた。

だが、コルクの需要が減り、放置された森が増えれば山火事などが懸念されるため、ゴルフ場や宅地化が急速に進んでおり、生態系破壊が問題になっている。



「植樹を通して環境問題の解決に貢献したい」と語る山本真三社長。右がタイシコーポレーションの代表取締役山本真三氏。

そこで、「父の墓を建ててくれた現地の人たちに恩返しをしたい」と、スペイン・アンダルシア州政府に植樹活動を申請。売上げの一部を寄付する形で2015年から毎年1500~1600本ほどの植樹を行っている。

—今後の目標は

植樹活動でNo. 1 企業になるため、年1万本の植樹を目指している。そのため、事業を通じてイベリコ豚を世界に広

めたい。コルク樫はドングリの実をつけるまで約40年という年月がかかるうえ、上質のイベリコ豚を育てるためには、樹齢100年以上のドングリの実が必要だ。そのため、植樹活動がすぐに売上げにつながるわけではないが、古代から続く文化と豊かな自然環境は、誰かが守らなければならない。長い時間をかけて、持続可能な形にして次世代に残していきたいと思っている。(PRリンク 立藤慶子)



SDGs (エス・ディー・ジーズ) 貧困や環境問題などの解決を目指し、2015年9月の国連サミットで採択された国際目標「持続可能な開発のための2030アジェンダ」。Sustainable Development Goalsの略語。17の開発目標と、それらを達成するための具体的な169のターゲットで構成される。